



富山で育つ宿根草の組み合わせとデザイン

～ 36 イソギク ～

職藝学院

教授 渡邊 美保子

秋から冬にかけての宿根草ガーデンで、ひときわ目立つのがイソギクです。枯れ姿ばかりの宿根草の庭で、その場所だけ春が来たかのように色鮮やかだからです。イソギクは日本の野生菊の一種で、海岸に自生していることから磯菊という名がつけられたとのこと。10月下旬から12月にかけて、40cmほどの茎の先に黄色の小花をたくさん咲かせます。イソギクの葉の色は表と裏で違います。表は青みがかった灰色で裏は白です。葉に白い縁取りがあるのは裏の葉が少しだけ表に反り返っているためです。黄色の花は、この美しい葉にぐるりと囲まれて咲きます(写真1)。



写真1 イソギクの花。筒状の小花が集まって外側から開花する。11月中旬

10月中旬になると、イソギクの茎の先に透明な膜に包まれた5ミリ程度の丸いつぼみが房状に付きます。11月初旬には、その透明な膜の中から直径1ミリにも満たない黄色のつぼみの集団が現れます。このつぼみたちが外側から順番に開花するため、花を觀賞できる期間がとても長いのです。満開になるのは11月中旬頃です。その後、12月中旬にかけて、花は黄色から黄土色に変化してゆきます。また、葉は年末からお正月にかけて紅葉します(写真2)。冬の姿に変化したイソギクを見ると、花壇に色があるだけでもありがたい気持ちになります。2月になると花茎の葉はカラカラに枯れて、ぼろ雑巾がぶら下がっているような姿になりますが、枯れた茎の根元の周りには、おはじきをばらまいたみたいに青緑色の新芽が所々に顔を出します(写真3)。この新芽が成長して秋に再び花を咲かせます。

イソギクは、ひと冬越すたびに株全体が大きくなってゆきます。地面を掘ってみると咲き終わった花茎の根元から地下茎が伸びているのが分かります。この

地下茎が伸びてその先に新芽を付けて陣地を広げてゆきます。イソギクの広がり方はとても遠慮深いほうです。隣に植えられている宿根草の中にまで、ずけずけと入り込むことはありません。できるだけ迷惑がかからないように空いている場所に地下茎を伸ばしながら成長しているようです。

イソギクは、強い日差しと乾燥している所を好みます。庭園では、一日中日が当たり、水はけの良い場所を選びましょう。お手入れは、花茎が枯れる2月頃に根元から刈り込む程度です。花茎は放射状に広がるため、地面をこんもりと覆ってくれますので除草の手間もかかりません。黄色の花と白い縁取りのある青緑色の葉が互いを引き立てているので、花壇にイソギクが一株あるだけで、とても存在感があります。組み合わせは、イソギクと同じ環境を好むゲンペイコギクなどを隣に植えると良いでしょう。



写真2 紅葉したイソギクの葉。花は12月末には咲き終わる。1月初旬



写真3 親株の根元から伸びた地下茎の先に新芽が出る。3月中旬